

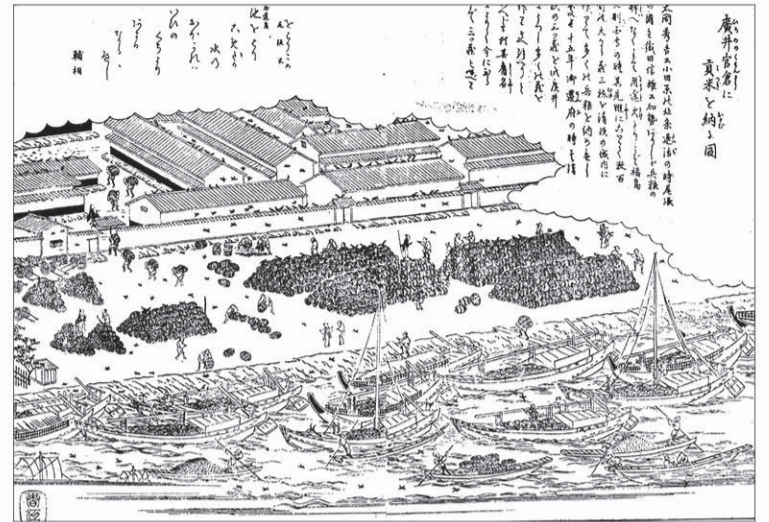
府下第一の用川 堀川

堀川は城下への輸送路として活躍し、『尾張志』は「凡、諸国の商船、米穀・炭・薪・竹木・器財・魚菜の類、諸雑物を運漕するに此川を出入りし、府下第一の用川也」と記録している。

米の輸送

主食である米は重くてかさばるので、輸送には舟がうってつけである。堀川の西岸には多くの米商人が店を構え、活発な取引を行っていた。

また、年貢も原則として米で納められた。納屋橋東南には藩の広大な蔵屋敷がおかれ、26棟の蔵は7万3千石の米を収蔵できた。毎年季節になると年貢米を積んだ舟がたくさん来て陸揚げする光景が見られた。



『尾張名所図会』

堀川を行く筏

名古屋は良質な木曾桧の集散地として全国に知られ、材木業で繁栄していた。

木曾山が尾張藩領になったのは元和元年(1615)のことだ。初代藩主の義直が春姫と結婚した時、家康が春姫の化粧料として木曾を尾張藩領にしたといわれる。

木曾で伐採された木材は木曾川を下り、当時は堀川の河口付近であった白鳥の材木場(貯



『尾張名所図会』

木場)へと運び込まれた。藩から払い下げを受けた材木商人は、木材を筏を組んで堀川をさかのぼり、伝馬橋の上流東岸の元材木・上材木・下材木町にある店へ運び、製材して販売した。

これらの町は材木産業で栄え、祭風景は「当府の繁盛」という名で『尾張名所図会』に描かれている。



熱田神領字入図
(名古屋市史:地図編)

膨大な量の肥料

昔は農業が一番大きな産業で、江戸時代になると干鰯やほしか粕しめかすなどお金で買う金肥が盛んに使われ、堀川はその輸送で賑わった。

寛政4年(1792)の一年間に尾張へ運ばれた商品を見ると、一番多いのが「呉服・太物」と「いさば・ほしか」で、どちらも14万両もの金額で、全体に占める割合は、それぞれ22%にも及ぶ。「いさば」とは塩魚や干魚、「ほしか」は脂を搾ったあとの鰯などのことで肥料にした。どちらも魚類なので一括りとなっている。呉服などと同額だが、単価が安い物なので量は膨大であった。

名古屋へ運び込まれた干鰯は、房総半島や三陸産の物が主体だ。江戸の干鰯問屋から名古屋の問屋が購入して船で熱田へ、さらに堀川をさかのぼって城下へと運ばれる。天明4年(1784)には堀川筋に干鰯問屋6軒、他の町を含めると20件の問屋があった。

他国より御当地へ
入込候荷物金高

品名	金額(千両)
呉服・太物	140
いさば・ほしか	140
大小豆類	50
油	50
藍玉・染草	30
多葉粉(たばこ)	25
葉種	25
白木・薪	25
紙	20
蠟燭・荒物	20
塩	20
金物鉄類	20
綿	20
古手類	20
麻	15
小間物類	15
果物・干物	8
合計	843

尾州名古屋商物一年中分見積書上
(寛政4年:1792)

『新修名古屋市史』より